

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

2月 1日 今日の通読箇所 エステル記 1章1～12

「高慢な王妃」

アハシュエロスは、クセルクセス1世（BC486～465）の別名と言われる。ペルシャ帝国は、今や、ここに記されているように、ほとんど当時の全世界を支配するほどになっていたのである。ところがこの頃から、西方エーゲ海を隔て、ようやく強力になってきたギリシャと接触するようになり、結局ペルシャとギリシャとの長期にわたる戦争、ギリシャ人のいわゆるペルシャ戦争が行われることになる。この章に記されている半年間にもわたる全国会議は、存亡をかけたこの大戦争の遂行に、関係があるのかもしれない。皇后ワシテは尊大高慢、わがまま勝手に、かねがね王や重臣たちの反感を招き、しかも今や限界に達していたのであるが、それも悟らず、また大切な時にわがままをして、これが彼女の命取りとなった。

2月 2日 今日の通読箇所 エステル記 1章13～22

「王妃の失脚」

こういう重大な場面となれば、いくら王様でも、人心を収攬して国民の協力を確保しなければならないから、おのずから臣下をもてなす態度をとる。王妃も王を助けて、言わばホステス役を勤めなければならない。これも公務の一部である。また王妃は、国中の良妻の模範であること、すなわちファーストレディーであることが期待される。ワシテはこれらの点で落第であった。たまりかねた王は重臣と相談する。重臣たちも賛成したから、いよいよワシテ王妃失脚の局面となった。高慢で、取り巻き連のおべっかばかり聞いて、いい気になっていると危険だ。

2月 3日 今日の通読箇所 エステル記 2章1～11

「王妃オークション」

失脚したワシテに代わる王妃を選ぶために、国中から候補者を推薦することになった。ユダヤ人モルデカイの養女ハダッサ（おそらく王妃になったときに改名してエステルと呼ばれた）もその一人として推薦を受けたのである。選ばれて王妃となるとすれば、それは光栄である。アハシュエロス王の王妃はともかくとして、これは教会がこの世から選ばれて、キリストの花嫁と立てられた、その光栄を連想させる物語である。エステル記は、ルツ記と共に、聖書中女性の名を冠して呼ばれる二書中の一つであって、確かにエステルはその名（意味

は星)のように、旧約聖書中のスターなのである。

2月 4日 今日の通読箇所 エステル記 2章12～23

「王妃エステル」

娘たちのお目見えまで、一年間の準備の様子を見ると、まるで体質改善、生活改善が行われるようだ。これも教会が「小羊の婚宴」と呼ばれる、キリストの再臨に対して備える姿に、また「エステルを愛し、恵みと慈しみを与え、王妃の冠を彼女にいただきせ」る王の姿にキリストを、重ね合わせて考えることもできよう。モルデカイは、もともと王宮に何かの身分職責を持っていた人物と思うが、はしなくも、二人の危険人物（彼らは一端の怒りから王を暗殺しようとした）に気づき、エステルを通して王に知らせた。調査の結果これが事実だったから、この二人は処刑され、モルデカイ父娘は面目をほどこした。この事件は記録された。実は王は間もなく忘れてしまうのだ。だからこれは記録された事で後で役立つのだ。皆さんは日記をつけていますか。それは案外、証のときなど役に立ちますよ。

2月 5日 今日の通読箇所 エステル記 3章1～6

「ポグロム計画」

当時のペルシャ帝国は、いくらか今のアメリカのように、多種類の民族が生活していて、有力な者は、種族や出身地方にかかわりなく、比較的自由に起用されていたと見える。と共に、有力な人物は、自然に自分の出身の種族を代表する形になるし、その保護便益をはかるのも、自然な勢いと言わねばならない。今を時めく有力者、権勢者ハマンは、アマレク王族の出身だったが、そのアマレク人がイスラエル人を憎むことは、出エジプト記17章以来の伝統で、一方ユダヤ人の方でも、アマレク人と妥協することを一種の罪と心得ていたのである。従ってそれが、ユダヤ人の指導者で有力者のモルデカイの態度にも表われているので、怒ったハマンは自分の権勢を利用して、全ユダヤ人の虐殺、すなわち「ポグロム」を計画するに至った。

2月 6日 今日の通読箇所 エステル記 3章7～15

「ユダヤ人の財産」

異教の国々では、個人生活の吉凶だけでなく、国の政策決定などにも「くじ」が用いられる例が多かった。昔の中国や日本でも、占い師の一群が膨大な官庁を構えていたものだ。この時ペルシャは、長引く対ギリシャ戦争のため、一種の非常時になっている。その緊張した政策決定のために引かれた「くじ」の結果だとして、ハマンは王に、「ポグロム（組織的計画的虐殺）」を（その対象が

ユダヤ人であることは明白にせず) 進言した。ユダヤ人は真の神を礼拝し、その律法を守っていて、異教国では一般的な偶像礼拝をせず、またそれから生じた風習にも従わない。系図を大切にしておいて他民族と混血せず、集団生活を守っているから、国の中にまた一つの独立国があるようで、戦争中などは特に警戒されるのだ。また彼らの膨大な財産を没収できるだろうと言う提言は、増大する一方の戦費調達に苦勞している王様にとって魅力的だった。かくて12月13日を期して、ポグロムを実行することが決定された。

2月 7日 今日の通読箇所 エステル記 4章1～17

「いのちがけ」

第二次大戦中、ヒトラーの命令によって行われた、ヨーロッパのポグロムは、まだ歴史の記憶に生々しいが、この時、ペルシャのユダヤ人も、同じ運命に襲われようとしていたのである。全国のユダヤ人は悲しみ、断食し、叫び、祈った。モルデカイ、エステルも当然巻き込まれた。しかもエステルは、王妃なる故に、身を張ってユダヤ人救助に立ち上がるよう、モルデカイから求められた。召されない者が勝手に王に近づくことを厳禁されているのは、今でもアメリカ大統領に、不意に誰かがつかつかと接近すれば、射殺されるのと同じだ。昔のことだから、王妃としてこの規則の例外ではなかった。

2月 8日 今日の通読箇所 エステル記 5章1～14

「王妃のパーティー」

秋の空のように気まぐれな王様の心とて、神様の摂理の外にはない。一ヶ月も王様から召しのなかったエステルが、祈りつつ、恐れつつ、王の庭に立っているのを見たとき、急に懐かしさを感じたか、金の杖を差し伸べてエステルを召し、ここに久しぶりに、王妃エステルをホステスにしたパーティーが開催されることになった。いかにエステルの心がはやったとて、王の信任厚くお気に入りハマンを、にわかには攻撃し、訴えることはできない。そこでこのパーティーにハマンを招待することにしたのは、きわめて自然であったし、その間、少しずつ、神様が摂理のみ手のうちに万事を導いてくださるでしょうという、エステルの祈りと期待があつたことだったと思われる。高慢なハマスが、これですっかり気を良くして増長し、結局失脚の方向に進む経緯も面白い。

2月 9日 今日の通読箇所 エステル記 6章1～14

「モルデカイ昇進」

王様が夜眠れないでいる時、自分の政治に何か手落ちがないかを考えるため、家来に記録の書を読ませたのは、なかなか良い心掛けだ。よし王様に手落ちが

あったとしても、家来の方からそれを注意することは、なかなかできないから、指導者、責任者たる者、念には念を入れることが必要だ。さて、先のモルデカイ、エステル功績に対して、何も報奨を与えなかったことに気がついた王様は、折りから王の庭にいたハマンを呼んで相談をかける。うぬぼれの強いハマンが、てっきり自分のことを言われていると早合点して最高の処遇を進言する。実は囚に乗ったハマンは、モルデカイの処刑を訴えるつもりで、厚かましく出頭していたのだが、反対の結果になって、もう取り返しがつかない。モルデカイは昇進した。王様の気まぐれ、たまたまの不眠、ハマンのひとりよがり、と悪計と、それさえ神は摂理の中に配剤し給うた。これこそ神様が私たちの祈りに答えてくださる時、摂理の手の及ばない範囲はないことの、証明である。

2月10日 今日通読箇所 エステル記 7章1～10

「モアブ遠征」

エステルのパーティー二日目にもハマンは招待された。王はエステルを愛して、もう一度、そのほしい物を尋ねた。国の半分でも、ほしければやろう、という言葉である。エステルは王に求めて、総虐殺の陰謀にさらされている、エステル自身、モルデカイ、さらに全ユダヤ人の生命の救いを願った。ここにおいて王は、自分自身までもハマンの一味の、おためごかしの謀略に乗せられていたのを悟った。うろたえたハマンが、エステルのとりなしに頼ろうと、しつこくしているのを王に見られたのが、更に失敗の上塗り、とうとうハマンは、モルデカイのために用意した死刑台の上で処刑された。

2月11日 今日通読箇所 エステル記 8章1～17

「ポグロム中止」

今はアマレク人ハマンに代わって、ユダヤ人モルデカイが権力の座につき、その印綬を帯び、その官邸に入り、ポグロム中止の命令を出す許しを得た。しかし王様がすでに出してしまった命令を、全部取り消すというわけにはいかない。形式的にはユダヤ人の自衛権を布告することとなった。中央では反ユダヤ主義の張本人ハマンが処刑され、ユダヤ人モルデカイが権力を握り、その上この布告が出たので、事実上ポグロムは中止消滅となり、今や国中のユダヤ人の間に、大きな感謝が沸き起こったのである。

2月12日 今日通読箇所 エステル記 9章1～32

「プリムの祭」

それでも12月13日、ポグロムの予定の日には、ユダヤ人は万一のことを考えて、武装して集結した。中にはあくまでユダヤ人を憎んで攻撃した者もあつ

たので、ところどころで小戦闘があった。勿論ユダヤ人の勝利に終わり、結果としては、積極的反ユダヤ主義者は一掃されることになった。ハマンの一族も、破れかぶれの抵抗を試みた後に、全部処刑された。昔からユダヤ人たちは、神様の恵みと力によってエジプトから救われたことを記念して「過越の祭」などの祝日を守って来たが、ペルシャにおける今度の救いを記念して、この日を「プリムの祭」として祝日に加えたのも故あることであった。神の恵みを記念するのは良い。教会の聖餐式は主の十字架の記念である。誕生日も結婚記念日も、我々にとってそれぞれ大切に、かつ幸福なものだと思う。

2月13日 今日に通読箇所 エステル記 10章1～3

「断食と祈り」

エステル記には「神」という字も「祈り」という言葉も一つも出て来ない。我々だったら当然「祈り」と言うべきところなどに、ただ「断食」と書いてある。異教の国ペルシャの寄留民で、しかも全滅の危険を伴う迫害をやっと免れたユダヤ人が、周囲を宗教的に刺激しないように用心深く書いた聖書だということがわかる。しかし信仰のある人が読めばすぐ意味が通じる。またこの聖書をヘブル語で見ると、ところどころに、神の名「ヤーウエ」という言葉を、一文字ずつ単語の頭文字に揃えてある場所があって、言わば神の名は「かくし文字」でちりばめられているなど、いかにも苦心のあるところだ。

2月14日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 1：1～6

「全てに優るキリスト」

ヘブル人への手紙は、迫害の下にあるクリスチャンたちに送られた励ましの言葉です。ペテロの第一の手紙とヨハネ黙示録と並んで迫害の下で書かれ、これをペテロは倫理的に、ヨハネは黙示的に、ヘブルの著者はキリスト論的に記しています。ヘブル人への手紙を3つに大別すると、第一はキリストの人格の優越性（1：1～4：13）、第二は、キリストの祭司職の優越性（4：14～10：18）、第三は、キリストにある生活の優越性（10：19～13：25）が記されています。4節には「御子は、…御使いたちの名にまさっている」とあります。キリストは天使ガブリエル、ミカエルにまさる名を与えられ、後にも先にもない神の子と命名されたただ一人のお方です。

2月15日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 1：7～14

「見えない世界」

御子については、初めに地の基をおすえになり、天もみ手のわざであり、これらのものは（やがて）滅びて衣のように（新しく）変わるけれど、いつまでも

いまし、変わらないお方です。御使たちについては、奉仕のためにつかわされたとあります（14節）。イエス様の「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。……彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである。（マタイ福音書 18章 10節）」というおことばを思い起します。御使は神様の御心に従って、神様と人に奉仕するために現存しているのです。わたしたちは、聖書により目に見えない、理解を超えた事柄について教えられます。

2月16日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 2：1～9

「御使よりも低く」

イエス・キリスト様は世界を創造され、御使に優るお方です。偉大なイエス様を知ったのですから、イエス様による救いを一層心に留めなければなりません。そうでないと、おし流されてしまいます。すなわち指輪が抜け落ちて失われてしまうように永遠の命に関わる大切な救いを失ってしまう危険があります。すでに与えられている律法においてさえ、罪や不従順には刑罰という報いがあります。まして尊い救いを気にも留めず、ないがしろにするなら、永遠の命を失うことになるのです。この救いを提供するために神であられるイエス様が、「御使より低い者」とされ、十字架で死なれました。「それは、神の恵みによって、すべての人のために死をあじわわれるため」でした。そして復活され、今は栄光をお受けくださいました。

2月17日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 2：10～18

「イエス様の同情」

この手紙の著者は、神様がイエス様を、十字架の苦難を経て人類の罪の贖いを全うし、救い主となされたのは、神様に相応しいことであった、と告白しています。また神様は、この贖いのみわざによって、最後の敵である死を滅ぼし、死の恐怖から私たちを解放して下さった、と言っています。そして彼ら以上の苦しみに会われたイエス様は、悪魔の試練と迫害にあって苦しんでいる彼らに深い同情を示されたのです。17節には、イエス様が「あわれみ深い忠実な大祭司」とあります。「あわれみ深い」という言葉は、報酬を求めず相手を愛するという意味です。また「忠実」とは、「真実」とも訳せる言葉で、神様が約束を必ず守られるという意味です。そのイエス様が恵みとまことをもって同情して下さる事は本当に幸いなことです。

2月18日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 3：1～6

「モーセに優るイエス」

イエス様が、預言者よりも天使よりも優っていると共に、ここではモーセよりも優っていることを証明しています。イエス様は、いくつかの点でモーセと似ています。神様が彼を立てたこと、その地位と職務を定められたこと、彼が忠実であったこと、彼の働きは神の家全体に及んだこと等です。一方イエス様は、モーセよりもより多くの栄誉を受けるにふさわしい方です。モーセ自身は彼が仕えている神の家の一部でしたが、イエス様は家を建てる者、神ご自身でした。6節の「神の家」とはクリスチャンのことで、イエス様はこの家の主です。ですから常にイエス様に目を注ぎ、「彼を思い見るべき」（1節）なのです。

2月19日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 3：7～14

「み声に従順に」

あなたがたは、神様の家族なのです。「だから」聖霊に従いなさい、と言われていきます。カッコ内は詩篇の引用です。かつてイスラエルの人々は、約束の地カナンを目指しました。紅海の奇跡やマナを始め、40年という長い年月は神様のみわざの日々でした。「わたしを試みためし」とは「わたしの忍耐深さを試み、わたしの寛容をためし」と訳されています。残念なことに彼らは、神様のご忍耐とご寛容に甘え、心をかたくなにして、約束の地に入れず「安息」に、はいれませんでした。これは大きな戒めです。「不信仰な悪い心」で、神様から離れないように、罪の惑わしに陥って心をかたくなにする者がいないよう、日々励まし合い、主を信じた最初の確信を終わりまで保たせていただきましょう。

2月20日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 3：14～4：2

「信仰によって」

荒野を旅したイスラエルの人々は、神様のみ声を聞いたのに、心をかたくなにしました。彼らが約束の地、そして「安息」に入れなかったのは不信仰のゆえでした。コリント人への第一の手紙10章11節に「これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。」とあります。彼らは、エジプトの奴隷生活から解放され、約束の地に行けるといって、良い知らせを聞きましたが、無益でした。彼らは、その良い知らせと信仰とを一つに合わせなかったからです。私たちは福音を聞き安息の約束を聞いています。聖書によって御言を教えられています。大切なのは御言を信仰によって信じ受け入れることです。

2月21日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 4：3～11

「神の安息」

ここには、「神を信じる者に与えられる霊的な意味での神の永遠の安息」（3節）、「約束の地カナンに入る意味での神の安息」（6，8節）、「神が天地創造のわざを成し終えて入られた安息」（4節）の3種類の神の安息について記されています。この神のみわざである「神の安息」は、「世の初めに、でき上がっているのです」（4節）。ヨシュアに率いられたイスラエルの民が入った約束の地カナンは、その神の永遠の安息のひな型なのです。そこで著者は、エジプトを出た民が神に対する不従順のために、約束の地に入れなかった事を警告したのです。そしてわたしたちが、今もこの神の安息に入るように、かつてのイスラエル人の不従順にならって落後しないように、信仰をもって神の安息に入るように勧めたのです。

2月22日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 4：12～16

「恵みの御座に近づく」

ヘブル人への手紙3章12節で「生ける神」と言った著者は、その神様が、ご自分の「ことば」によって人間に働きかけることを力説しています。だから神のことばは、「きょう」も生きていて、力があるのです。コリント人へ第一の手紙1章18節には「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」と書いてあります。この全てを見通す、力ある神のみことばの前に、私たちは御前に裸で立つのです。しかし今、私たちには、その神の御座にあり、弁護してくださる大祭司イエス様がいるのです。ですから私たちは、人間的弱さを感じる時、いつでも神の憐れみと罪の赦しの恵みとを受けるために、はばかりことなく「恵みの御座」近づけるのです。

2月23日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 5：1～7

「大祭司キリスト」

大祭司は、神様に関する事柄を人々に代わって行うよう、アロンの家系から選ばれ任命されました。彼は民の罪のためにいけにえを捧げるだけでなく、自分自身の罪のためにもいけにえを捧げ、罪の許しを得なければなりません。このように自分も罪と弱さをまぬかれないので、弱い民を忍耐深く取り扱うことができました。私たちは、サレムの王メルキゼデクについて詳しく知ることはできませんが、かつて、彼がアブラハムを祝福した際、メルキゼデクについて「いと高き神の祭司」と記されています（創世記14：18）。キリストはメルキゼデクに等しい祭司として神様から任命されました。すなわち、十字架の死と復活ののち、父なる神様の右に座し、永遠に執り成してくださるのです。



2月24日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 5：7～14

「永遠の救の源」

キリストは、地上のご生涯において、激しい叫びと涙とをもって、深い祈りと願いをささげられました。日々の祈り、ゲッセマネでの血の汗がしたたるような祈り、そして十字架での苦しみと祈り。キリストは、神であられたのですから、超越的なみ力を用いることも可能でした。しかし、そうなさいませんでした。キリストは初めから父なる神様に従順でしたが、さらに従順に苦難を甘んじてお受けになり十字架で死なれました。三日目に復活なされ、永遠の救の源となられたのです。キリストが激しい苦しみを通られたのは、父なる神様への信仰と従順の故です。このように、キリストは、さまざまな苦しみにあつてくださったので、わたしたちの弱さを思いやり、時機を得た助けを与えてくださる真の大祭司なのです。

2月25日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 6：1～8

「完成を目ざして」

1、2節にはキリスト教の基礎的重要な教えである「悔い改め」「信仰」「バプテスマ」「按手」「死人の復活」「永遠のさばき」の6つが記されてあります。入信もない人々は、これらの基本の教えをしっかりと学ぶことは大切です。2節の終わりの「基本の教えを繰り返し学ぶことをやめる」とは、これが有害だから捨ててしまえ、ということではありません。聖書の基本的な知識をもって満足しているのではなく、それを実際に生かすことが大切である、と言っているのです。それは周囲の人々に積極的に生きた信仰の証をたてていくことです。こうした完成を目ざして進むために、「堅い食物」を食べられる成人となって行くことを期待しているのです。

2月26日 今日に通読箇所 ヘブル人への手紙 7：1～10

「より優れた祭司」

人間は、そのままでは、神様に祈りを受け入れていただくこともできず、祝福もしていただけません。人間の罪が神様と人間を隔てているからです。祭司の職務は、アロンの家系に与えられ、神様に対して人間をとりなす役割がありました。彼らは罪の許しのために、動物の犠牲を繰り返し捧げなければなりません。これに対して、メルキゼデクは、完全な祭司キリストの型です。メルキゼデクは「義の王」「平和の王」という意味です。信仰の父アブラハムが彼に十分の一を与えたのですから、メルキゼデクは偉大な人物でした。後に祭司の職務につくレビは生れていませんが、同様に納めたと言えます。このメルキゼデクに等しい大祭司がキリストです。

2月27日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 7：11～19

「さらにすぐれた望み」

レビ系の祭司によっては、完全な罪の許しによる神様との親しい関係は得られませんでした。ですから、メルキゼデクの職に従った別の祭司が立てられる必要があったのです。別の祭司とはキリストです。キリストは、律法によらず、終りのない命に基づいて祭司に任じられました。「あなたはメルキゼデクの位にしたがって、とこしえに祭司である」（詩篇 110 篇 4 節）とある通りです。キリストは祭司の家系の部族ではない、ユダ族から出られました。律法によるレビ系の祭司は完全でなく、その規定は効力がないので廃止されたのです。こうして私たちに、すぐれた希望が与えられました。私たちは、完全な祭司キリストによって、神様にお近づきできるようになったのです。

2月28日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 7：20～28

「永遠の大祭司」

キリストが永遠の祭司として卓越している点が2つ述べられています。一つは、キリストの祭司職は特別な誓いによって制定されたものであって、普通の祭司職とは違っていることです。もう一つは、アロン系の祭司職は、世襲性をとっているが、キリストの祭司職は永遠である、ということです。アロン系の祭司は、死によって、大祭司職を続けることは出来ません。故に多くの大祭司が立てられてきました。しかしキリストは、「永遠に祭司」（21 節）ですから、変わらない祭司の務めを続けられるのです。しかもキリストは、復活して、永遠に生きておられるので、「彼によって神に来る人々を、いつも救うことができる」（25 節）完全なお方なのです。

2月29日 今日の通読箇所 ヘブル人への手紙 8：1～6

「神の右に座すイエス」

「天にあって大能者の御座の右に座し」（1 節）とは、イエス様が、「死んで、葬られ、よみに下り、三日目に死人の中からよみがえり、天に昇り」というこの世の歴史にただ一度だけ起こった出来事を通して、現在も、「神の右に座し」、イエス様の死によるあがないを信じる者のために、全能の神にとりなしておられるということです。だから大祭司職の唯一の目的は、神様との和解ということでした。それで、キリストは永遠の大祭司となるために、一度だけ、人類の罪のために十字架にかかり、贖いのわざを完成されたのです。それは彼自身のいけにえが永遠に有効であり、キリストによる和解のみが、真の大祭司の職務であることを教えているのです。